

財団法人 熊本放送文化振興財団
理事長 小堀富夫 様

創作劇「青柳」制作・上演実行委員会

創作劇「青柳」実績報告書

1 団体名

創作劇「青柳」制作・上演実行委員会

2 事業実施場所・実施期間

熊本県立劇場 演劇ホール

平成 23 年 10 月 27 日～平成 23 年 10 月 27 日

3 事業内容

ハーンの代表作「怪談」のなかから中世細川家が登場する「青柳の話」を題材に、平川祐弘東大名誉教授に作・脚本を依頼しました。平川氏はわが国のハーン研究の第一人者であり、ダンテの「神曲」などの名訳で知られ、かつシェイクスピアの「オセロ」を演劇人の要望で夢幻能として戯曲化に成功させています。テーマは樹霊。一木一草にも命が宿るというもので、自然への畏怖、自然環境保全につながるテーマです。明治の熊本、大名家の細川が登場します。夢幻能様式の戯曲として書かれたものを、能、演劇、日舞・邦楽の融合による表現構成とした初めての試みでした。会場は千人を越える方にご来場頂き、熊本公演は大成功を収めました。

すべてがオリジナルです。能の部分は観世流の菊本澄代(熊本市)を中心に、中央で活躍する若手・中堅を動員、演劇部分は県演劇人協議会が担当しました。日舞・邦楽でも熊本出身で中央でも活躍する人々が加わり、熊本における能楽、演劇・邦楽などの全体的底上げも図っています。熊本公演の成功を、東京、ハーン(八雲)の母国であるアイルランドなど海外公演へとつなげて行きたいと考えています。

ハーンは五高の教師として3年間、熊本に住み、長男一雄も誕生します。教職のかたわら、精力的に日本の文化・民俗を取材、数々の執筆を行い、日本人のこころを世界に発信しました。ことに熊本のスピリッツを簡易、善良、素朴と見なし、そのスピリッツを保持することこそが極東の未来につながると論じました。

同公演に向け、熊本近代文学館などとタイアップし、シンポジウム、講座などを開催しました。

- ・主催 創作劇「青柳」制作・上演実行委員会(実行委員長・副島隆)
- ・共催 熊本日日新聞社、財団法人熊本公徳会、熊本県文化協会、熊本アイルランド協会
- ・後援 アイルランド大使館、熊本近代文学館友の会など
- ・助成 熊本県地域づくり“夢チャレンジ”推進事業、財団法人熊本公徳会、財団法人熊本放送文化振興財団

4 今後の展開

ハーン作品を一流の作家(平川祐弘)に委嘱し、夢幻能様式の戯曲として書かれたものを、能・演劇・日舞による表現構成とした初めての試みでした。この熊本公演の成功を受け、現在東京公演を計画中です。東京公演を成功させ、さらにはそれをアイルランド公演へとつなげ、熊本からの創造文化の発信を実現したいと考えています。

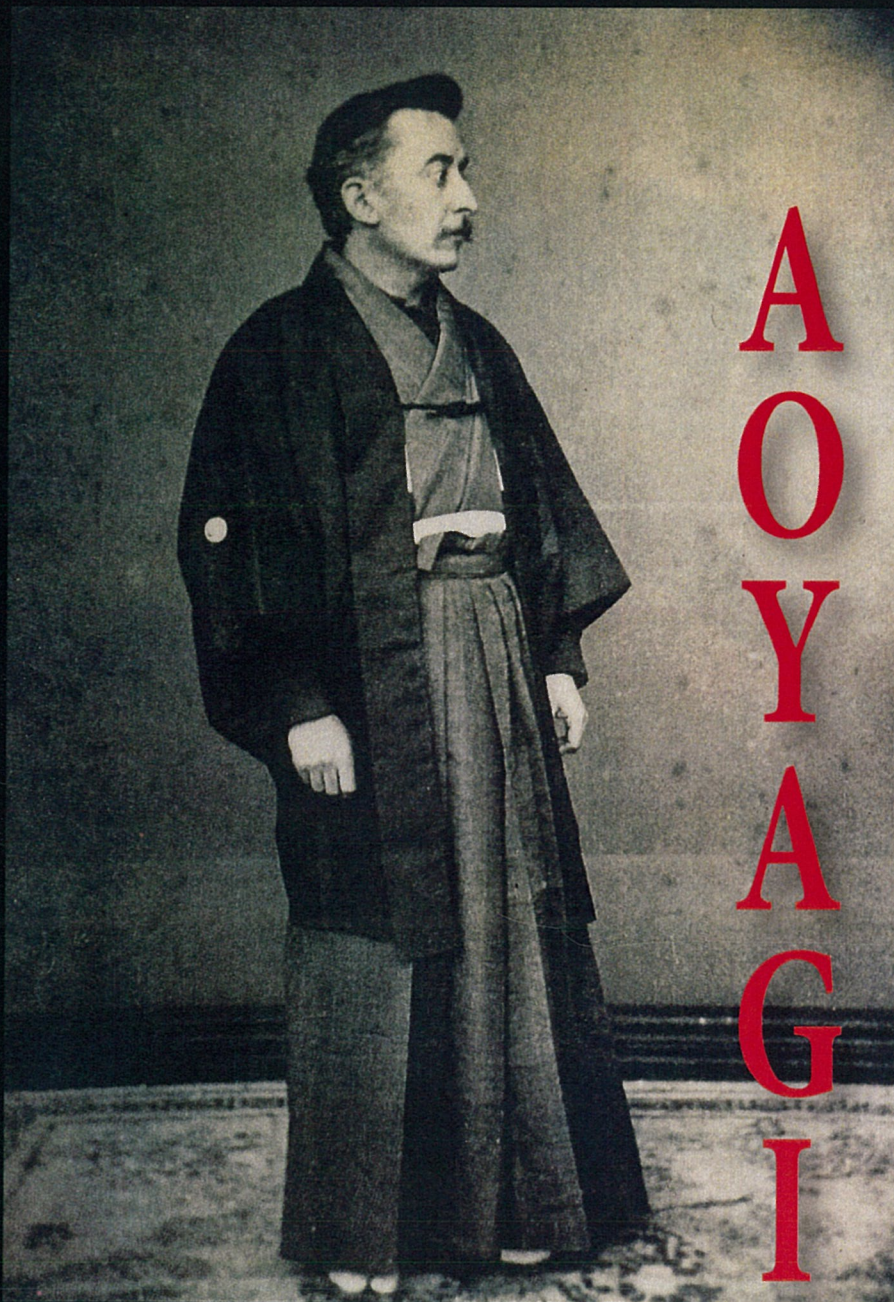
創作劇「青柳」 収支決算書

【 収 入 】

項 目	決 算 額 (円)	備 考
入場料収入	5,394,000	前売券 5,000円、当日券 6,000円
広告収入	500,000	プログラム広告料
地域づくり“夢チャレンジ”推進補助金	1,460,000	
財団法人熊本公德会助成金	1,000,000	
熊本放送文化振興財団助成金	300,000	
その他収入	33,303	
合 計	8,687,303	

【 支 出 】

項 目	決 算 額 (円)	備 考
謝礼・出演料	4,861,496	台本作成・演出依頼費、演劇・能楽・邦楽・日本舞踊出演料
旅費・宿泊費	130,755	航空券、宿泊料、駐車場代
借上費	822,810	会場使用料
舞台装置費	1,724,450	花束代、衣装使用料、公演ビデオ収録、映像・機材・管理、照明、舞台美術・装置
印刷費	740,375	デザイン制作料、ポスター、チラシ、チケット、パンフレット
事務通信費	177,002	封筒・ハガキ代、通信費、事務費
制作発表会・レセプション費	230,415	
合 計	8,687,303	



A
O
Y
A
G
I

小泉八雲「怪談」から創作舞台「青柳」公演

平成23年10月27日(木)
熊本県立劇場演劇ホール

和服姿のハーン

平川祐弘作「夢幻能青柳」

ごあいさつと能・日舞・演劇の出演者

夢幻能「青柳」 日本語 / 英語

小泉八雲 極東の将来

ご挨拶

創作劇「青柳」制作・上演実行委員会

委員長 副島 隆



ことしは、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が五高の英語教師として赴任し、120年に当たります。3年間ほど、熊本に住み、長男一雄が誕生し、教師のかたわら数々の執筆を行い、日本人のこころを世界に発信いたしました。ことに熊本のスピリッツを簡易、善良、素朴と見なし、そのスピリッツを保持することこそ極東の未来につながると論じております。この記念すべきことし、ハーン原作『怪談』から「青柳の話」などに題材を取り、創作舞台『青柳 AOYAGI』を制作・上演することになりました。蒲島県政の「品格ある熊本づくり」に寄与し、熊本からの文化創造の発信としたいという思いによるものです。わが国の比較文化・文学第一人者、平川祐弘東京大学名誉教授に、作・脚本をお願いいたしました。作品の舞台はすべて熊本になっております。テーマは「樹霊」。一木一草にも命が宿っているというもので、これは自然への畏怖、自然環境保全につながるものであります。夢幻能様式の戯曲として書かれた台本を、作者の意図をより明確に、かつ幻想的に描くため、能、演劇、日舞による舞台表現・構成となっています。

実行委員会の主体となっています熊本アイランド協会では、14年前、清和村(現山都町)の村民による清和文楽のアイランド公演を実施いたしました。この海外公演の成功がきっかけとなり、清和文楽に『雪女』(『怪談』から。半藤一利・作)という新しい作品が加わりました。私どもは今回の公演を成功させ、ハーン之父の国アイランド、母の国ギリシャなど海外公演へとつなげていきたいと夢をふくらませております。

深まります秋の一夜、みなさまと一緒に創作舞台『青柳 AOYAGI』を堪能したいと思っています。最後になりましたが、共催いただきました熊本日日新聞社、財団熊本公徳会、熊本県文化協会、ならびに助成いただきました熊本県、財団熊本公徳会、RKK熊本放送文化振興財団、ご後援いただきました報道各社、各文化団体にお礼を申し上げます。

第 53 回熊本県芸術文化祭参加

小泉八雲「怪談」から創作舞台「青柳」公演

10月27日木曜日に熊本県立劇場演劇ホールにて行われました。

本年は、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が五高の英語教師として赴任し、120年にあたります。三年間ほど、熊本に住み、長男一雄が誕生し、教師のかたわら数々の執筆を行い、日本人のこころを世界に発信いたしました。

ことに熊本のスピリッツを簡易、善良、素朴と見なし、そのスピリッツを保持することこそ極東の未来につながると論じております。この記念すべきことし、ハーン原作『怪談』から「青柳の話」などに題材を取り、創作舞台『青柳 AOYAGI』を制作・上演いたしました。

熊本からの文化創造の発信としたいという思いによるものです。

わが国の比較文化・文学第一人者、平川祐弘東京大学名誉教授に、作・脚本をお願いいたしました。夢幻様式の戯曲として書かれたものを、能楽、日本舞踊、演劇と異なる日本の伝統芸能を融合して表現された、すべてがオリジナルという初めての試みとなりました。熊本の自然豊かな名所を舞台に、精神性の高い日本人の心を表現しています。

テーマは「樹霊」。一木一草にも命が宿っているというもので、これは自然への畏怖、自然環境保全につながるものであります。

演 出 大江捷也

演出補 堀田 清

作 平川祐弘

出演

観世流能楽師 菊本澄代

日本舞踊家 高濱流光華々

熊本演劇人協議会の皆さん



あらすじ

熊本の五高教師として赴任してきた小泉ハ雲ことヘルンは、学生らを伴い、若葉の美しい季節、水前寺成趣園にやってくる。そこで学生岩木三四郎に出会う。茶屋の娘が桜の木の下で妖しく舞う姿に三四郎は魂を奪われる。実は三四郎は友忠という若侍の化身。二場は能の舞台。細川公の縁者の大名に仕える身で、主君の命で細川公のもとに急ぐ途中、吹雪に遭い、一軒家にたどり着く。そこには老夫婦と年若き娘、青柳がいて、友忠と青柳は惹かれあう。青柳を伴い、細川公の許しも得て、二人が仕合せな日々を過ごす。ある日、青柳が「いま、私は死にます」と叫び、死に絶える。三場は、花岡山の麓。三四郎が出征することになり、ハ雲も駅で見送るため、同行する。途中、三本の切り株がある。二本の柳の老樹と一本の若い柳の切り株であった。友忠の妻となった青柳は実は木の霊であった。三四郎は念仏を唱え、ハ雲も合掌する。「怪談」の中から「青柳の話」「十六桜」「乳母桜」に「大和物語」の葉守の神の歌、ミュッセの墓碑銘の詩なども題材にしている。



この作品は序の場と全三場から成り立っています。能の部分は観世流の菊本澄代さん（熊本市）を中心に、中央で活躍する若手・中堅を動員、演劇部分は県演劇人協議会が担当。日本舞踊は高濱流光華々さん、邦楽は今藤珠美さんを中心に熊本出身で中央でも活躍する人々が加わり行われました。

会場は1000人を超える入場者で溢れました。今後は、東京、ハーン（八雲）の母国であるアイerlandなど海外公演へと期待が高まります。



ハーンと熊本

ハーンが五高の英語教師になるため、島根県立の松江中学を辞し、妻のセツらを伴い、春日駅(熊本駅)に降り立ったのは明治24年11月19日。校長の嘉納治五郎が出迎え、手取本町の不知火館(のちの研屋支店)に案内しました。

この明治24年7月、門司から熊本まで鉄道が開通し、また熊本電燈会社が操業しています。熊本城そばの厩橋際に火力発電所が設けられ、城内の兵舎の灯りがこうこうと夜空を照らしていたようです。花畑一帯は練兵場が広がり、いまの市役所の場所は監獄でした。五高の構内に外人教師館がありましたが、不知火館近くに赤星家が母屋を明け渡して貸してくれるという話に居を構えます。筋向いに九州日日新聞社(熊日の前身)があり、さっそく購読しています。正月八日の六師団の閲兵式後の宴会にハーンも招待され、それが九州日日に報じられました。

「^{ひおうぎ}檜扇の三ツ紋ある黒羽二重の羽織に^{せんだいひら}仙台平の袴を着し扇子をチャンと差したる有様と目の色の青きに赤髭茫々たる顔と特に目立ちて見へたりければ、さても衆目を一身に引受け、花嫁も及ばぬ程見つめられし次第にて当日第一の^{あいきょう}愛嬌なりしと」松江からセツの養父母、養祖父などの家族やお手伝い、車夫(これは間もなく解雇)を伴い、料理人の松を呼び寄せます。養祖父の稲垣万右衛門は若いころ、松江藩主の若殿のお守り役だったといい、「愉快的な年寄^{ほうき}り」でした。熊本城下を「こおり、こおり」とふれ歩く行商人を呼びとめ、「その氷は伯耆大山から来るのか」と尋ねるなど、笑いの種をまき散らしました。招魂祭や藤崎宮のお祭りのときにもごったがえす雑踏のなかを出歩き、財布をすられるという騒ぎを起こしています。

一年後、坪井西堀端町に移り、長男の一雄はここで生まれました。稲垣老人はハーンの手紙に飛び込み、「フェロン公、天晴れだッ！生まれたで」とうれし涙を流し、腕まくりし、こぶしを振り立てて、男児出産を知らせたといます。

THE FUTURE OF THE FAR EAST ①

LAFCADIO HEARN

To think of the future in relation to the present is essential to civilization. The commonest workman in a civilized country does this. Instead of spending all the money he earns, as fast as he earns it, he will, if an intelligent man, save a large part of it as a provision against future want. This is the commonest kind of foresight. The statesman represents a much higher form of foresight. He thinks when opposing or proposing a law, — "What

will be the result of this law a hundred years after I am dead?" But the philosopher carries foresight much further. He asks : "What will be the result of the present conditions in a thousand years from now?" And he thinks not merely about one country, but about the whole human race.

ハーンと熊本

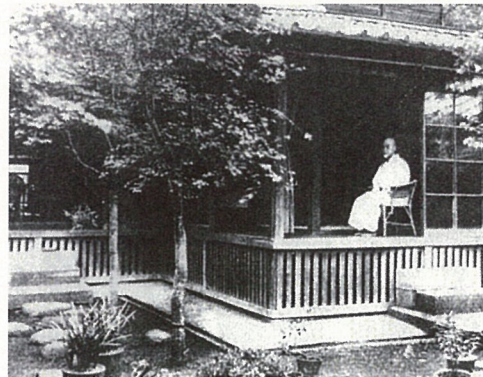
「この町は近代化されています。それから町が大きすぎ、お寺もない、お坊さんもない、珍しい風習もない」と松江中学の教頭西田千太郎に手紙に書き送っているハーンですが、熊本に移り住んでわずか2、3カ月で9キロも体重が増えています。西洋料理の食材が容易に手に入ったためです。

そして地蔵祭の日、美しい光景に出会います。地蔵堂はくさぐさの花や提灯で飾られ、大工連が子供たちが踊る屋台をこしらえ、日が暮れる露店が並びます。日が暮れ、ふと見ると、家の門前に大きなトンボがとまっていました。ハーンが子供組に与えた寄進に対するお礼でした。トンボの胴体は色紙でくるんだ松の枝、四枚の羽は四つの十能(炭火を運ぶ道具)、頭は土瓶でこしらえてありました。しかも、全体があやしく影をさすように置かれ、蠟燭の光で照らされていました。その造り物をこしらえたのが8歳前後の男の子で、「なんと日本の子供たちは美術的感覚の持ち主だろうか」とハーンは驚いています。

ハーンの一家が熊本を去ったのは日清戦争が始まった年の明治二十七年十月六日でした。



熊本時代のハーンとセツ



熊本手取本町のハーン旧居(赤星邸)。
人物は、教え子でもあった赤星典太氏

THE FUTURE OF THE FAR EAST ②

LAFCADIO HEARN

In speaking to you about the Future of the Orient, I wish to speak from the standpoint of the Western philosopher, — and therefore, not about Japan alone, or the Far East alone, but about the whole human race.

I must begin by saying that the future of the Far East depends partly upon the action of the Far West, -- though not altogether. One thing, at least, is certain, — that the greatest changes which are to take place in the Far East

will be made by Western influence. This influence is aggressive. But it is unavoidable. It cannot cease for generations. Before we think about the Orient in the future, let us consider the Occident in the present.

平川祐弘

死者と生者が交わるのは神道の特色で、それもあってこの世とあの世を往来する夢幻能がわが国では発達した。日本土着の宗教的雰囲気のおかげである。西洋でリアリズム演劇が行詰った時、イエイツ、パウンド、ウェイリーらは夢幻能に新世界を求めた。私も『オセロ』を夢幻能に仕立てク・ナウカ・シアターの上演で評判を呼んだことがある。その神道では樹にも虫にも霊があるとする。そう感じる日本人のアニミスティックな宗教心が古代ギリシャ人に似ると気づいた人は小泉八雲で、桜の精や柳の精にまつわる怪談も書いた。岩にも泉にも神が宿ると如実に感じたフランス・ルネサンスのロンサルも「神道的な」詩人と私は考える。東西世界を一つにまとめ、樹霊にまつわる夢幻能に仕立ててみたらどうだろう。



プロフィール

平川祐弘 (ひらかわ・すけひろ)

1931年東京生。東大教養学科卒。比較文学比較文化。東大名誉教授。

著書、『和魂洋才の系譜』(平凡社、博士論文)、

『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』(ミネルヴァ書房、和辻賞)、『米国大統領への手紙、市丸利之助伝』(出門堂)、

『天ハ自ラ助ケルモノヲ助ケ——中村正直と『西国立志編』』(名大出版会)、『アーサー・ウェイリー『源氏物語』の翻訳者』(白水社)、

『ダンテ『神曲』講義』(河出書房)。

『書物の声 歴史の声』(『熊本日日新聞』

連載、弦書房) Japan's Love-Hate Relationship with the West(Global Oriental), Lafcadio Hearn in International Perspectives(Global Oriental)。

THE FUTURE OF THE FAR EAST ③

LAFCADIO HEARN

The most remarkable fact connected with the progress of Western industrial civilization during this century has been the enormous increase of Western nations. In 1801, the population of England, or, rather, of all Great Britain, was 16,345,646. In 1892, the population was 37,787,953. If we look still further back, the figures are, of course, more startling. In Elizabeth's reign there were 5,600,517 people in England and

Wales; in Queen Victoria's reign there are 29,001,018 (year 1892). But the figures of 1892 do not include the many millions of Englishmen in Canada, the United States, South America, Australia, New Zealand, and South Africa — not to mention fifty other places. The population of Germany when Gibbon wrote his history was about 22,000,000: it is now 49,500,000.

平成 23 年 10 月 27 日創作劇「青柳」 制作発表と公演の様子

